

さまざまな

# 「奇妙な脳の癖」の例

脳の判断の癖は、これまでに数百種類以上も発見されています。  
そのうちのいくつかを紹介いたします。  
皆さんも、日頃の生活の中で思いあたることがあるでしょうか。

《出典》『自分では気づかないココロの盲点 完全版』(池谷裕二)を  
もとに再構成したもの。

## 問い1

デパートの試食販売コーナーで、ジャムを売りました。  
次のどちらのブースの売り上げが多かったでしょうか。

- ① 六種類のジャムを販売するブース。
- ② 二十四種類のジャムを販売するブース。

答え

## ①六種類のジャムを販売するブース。

### 【問い1の解説】

脳が同時に処理できる情報量は有限であり、許容量を超える  
と選ぶこと自体をやめてしまいます。

この場合は、六種類のブースのほうが、二十四種類のブース  
の七倍の売り上げがありました。

通りがかった客が足を止める確率は、二十四種類のほうが上  
でした。おそらく商品棚ただなが目立つからでしょう。しかし、実際  
に商品を買ってもらえる客の割合は、六種類のブースでは三十  
パーセントだったのに対し、二十四種類のブースでは三パーセ  
ントにとどまりました。

さらに客の満足度も、品数の少ないブースのほうが高かった  
のです。

客のことを考えるとつい多くの選択肢せんたくしを用意したくなります  
が、それは自己満足に過ぎないということがあるのです。

## 問い2

次のような場合を考えてみましょう。  
二つの選択肢のうち、どちらを選ぶ人が多いと思いますか。

- ① 一億円もらえる。
- ② 五十パーセントの確率で一億円もらえる。

答え

① 一億円もらえる。

では、次の場合はどちらを選ぶ人が多いでしょう。

- ③ 一億円損する。
- ④ 五十パーセントの確率で一億円損する。

答え

④五十パーセントの確率で一億円損する。

【問52の解説】

①②も、③④も、どちらを選んでも一億円の金額の動きですから、実質的には同じです。

ところが、脳はそのような冷静な判断をしません。感情に流されるのです。

一般的には、ヒトは、利益よりも損失に目が行きがちです。そのため、得をするときには堅実に①を選び、損をするときは「少しでも損をしない可能性」を求め、④を選ぶことが多いのです。

### 問い3

チケット代が五千円のコンサートに行く場面を思い浮かべてください。

**場面A** コンサート会場に着いたら、チケットを家に忘れてきたことに気づきました。もうすぐ開演。取りに戻る時間はありません。

**場面B** 当日券を買おうと会場に向かう途中、五千円札を一枚落としてしまいました。

財布にはまだ所持金があります。A・Bのどちらの場面のほうが、チケットをより強く買おうと思っただけでしょうか。

答え

場面Bのほうが、チケットを買う傾向が強い。

【問3の解説】

どちらの場面も、五千円を損しているという点では同じです。しかし、脳は「数学的には同等である。」などという合理的な判断はしません。

場面Aでは、自己投資は前売り券の購入によって既にすんでいます。これを自分の過失によって持参してこなかった場合、同じチケットを二度買う気にはならないものでしょう。チケットを忘れてきたという「損した感覚」に加え、同じチケットに「余計な出費をする」という、二重に損をする気分になります。

一方、場面Bでは、チケットを買うことは「自己投資」に相当しますから、所持金の紛失問題とは別のこととして考えることができるのです。

#### 問い4

三つの箱があります。どれか一つには景品が入っています。あなたは答えを知りませんが、出題者はどの箱が「当たり」かを知っています。

そこで、あなたは「当たり」だと思う箱を一つ選びました。すると、出題者はあなたが選ばなかった二つの箱から「はずれ」の箱を一つ開いて示してくれました。そして、あなたに「もう一度、箱を選び直してよい。」と言います。

この場合、次のどちらの行動を選ぶ人が多いでしょうか。

- ① 最初にした箱を変えない。
- ② 出題者が開けなかったもう一方の箱を選び直す。

答え

### ①最初に選んだ箱を変えない。

#### 【問い4の解説】

この場合、選択肢①を選ぶ人が多いのですが、確率から考えると、正しい選択は②です。最初に選んだ箱を捨て、別の箱に変えたほうが、当たりを引く確率は上がります。最初に選んだ箱が当たりである確率は三分の一ですが、「はずれ」が一つわかったあとでは、残りの箱が「当たり」である確率は二分の一になるからです。

にもかかわらず、この場合では、八十五パーセントの人が、最初に選んだ箱から変えないのです。

脳は、たとえ偶然に左右されることであっても、自分の能力や意志で「なんとかできる」「と妄想します。だから、自分の意志で選んだ最初の箱のほうが「当たりそう」だと感じるのです。

## 問い5

誰でも知っている有名な曲のメロディーが、頭の中を流れています。あなたは、その音楽に乗って、机をたたきながら心地よくリズムをとっています。

周囲の人々は、そんなあなたをじっと見ています。曲名を当てようとしているのです。

この場合、どちらの期待を抱く人が多いでしょうか。

① 私の刻むリズムから、どんな曲かを当てられる人はいるだろう。

② 私の脳裏で響いている曲を当てるのは無理だろう。

答え  
①私の刻むリズムから、どんな曲かを当てられる人はいるだろう。

【問い5の解説】

この場合、選択肢①を選ぶ人が多い結果になります。実験の結果、相手の半数以上は曲名を当ててくれるだろうと期待することがわかりました。ところが、実際に正解した人はわずか二・五パーセントでした。

知識は判断をゆがめます。脳は、一度知ってしまうと、自分の知っていることは相手も知っていると期待する傾向があります。

## 問 い 6

友達との待ち合わせに行く場面を思い浮かべてください。  
少し寝過ねぎしてしまい、約束の時間に間に合うかどうかのタイ  
ミングです。

そこで、裏通りの近道を通っていくことにしました。  
すると運悪く、先日の台風の影響えいきょうで橋が工事中でした。回り道  
をして、結局遅刻ちせき。

このとき、次のどちらの感情をもつ人が多いでしょうか。

- ① まあ仕方がないぞ。
- ② いつもの道で行けばよかった。

答え

②いつもの道で行けばよかった。

【問56の解説】

いわゆる「後悔」です。事が起こってから振り返ると、「前もって予測できた。」「本当なら実行できたのに。」「と思いがちです。どんなできごとでも、それが生じる前には、たくさんの可能性があったはずですが、あとから振り返れば現実が百パーセント必然に見えるものです。

この癖の悪い点は、「あれが予兆だった。」「のように、あるいはしない因果を創作して、妙な迷信を導いてしまうことです。

終わり